

月刊

地域保健

1
2009

●新春鼎談

●FACE2009
山口大学大学院医学系研究科教授
守田孝恵さん

地域保健活動の中長期ビジョン
保健師マインドを伝えるために



J041
JANUARY
2009

Face
2009



ヘルスプロモーションの三角形を支えるのは
「保健師の手」!

学生の持つ無限の力を徹底的に引き出す

山口大学大学院医学系研究科教授

守田孝恵 さん

photographs : Sei Kamiyasu

課題の多い臨地実習の現状を耳にする中、出色の実績を出している山口大学。保健所に1週間、市町村に2週間、総勢90人ほどの学生がすべて受け入れられ、深い学びを得ていく。「山口県内の保健師活動に果たせる役割があつたら、絶対に断らない」というスタンスから、地域に頼られる大学」を目指しているキー・プロフェッサーの守田先生。全員を「地域を見ること」の理解に到達させ、多忙な現場に「学生が来ると勉強になる」と言わしめる実習は、研究室の強いチームワークの結晶である。

保健師さんの「宝物」を見つける教員のひと言

—どのように実習先を確保していらっしゃいますか。

守田 90人前後の学生がいるので、ほとんど1年を通して、山口県内全域から実習施設の確保に努めています。地域看護は保健所と市町村が役割を分担して展開していくため、その両方を経験するように実習先を組み合わせます。

5〜7月の3カ月の間に約30人ずつの3グループが、実習内容の異なる数カ所の施設に、それぞれ合計3週間行きます。このため現場の「何人まで」とか、「何月は外して」といった要望の調整には十分な時間を割いています。

—実習内容についてお聞かせください。

守田 保健師がその地域をどう見ても事業を展開しているかを学ばせたいので、学生には「保健師さんと必ずカンファレンスをする」と、また「事業の始ま

った経緯や、実施の将来の方向性を聞くこと」を、事前にオリエンテーションしています。保健師さんにもこの点についてご協力をお願いしています。研究室の教員5人（ほかに山崎秀夫教授、高橋郁子講師、檀原三子助教、小野順子助教）も役割を分担し、できるだけカンファレンスに参加します。

保健師さんはたくさんの「宝物」を持っていらっしゃいますが、自分ではそれに気付いていない。そこで、具体例を話されたその場で、「今、言われたことが『事業の組織活動の主体性を引き出す』こと」だとか「地域の『実態を把握』すること」だと、私たちが学生に話し、ヘルスプロモーションや「地域を見る」ための理論を意識化させ、「考えること」につなげるのです。一度しかない実習の場で、保健師さんの体験から学生の学びを最大限に引き出すためには、教員がきっかけをつく

地域保健活動の 中長期ビジョン

保健師マインドを伝えるために

健康課題が噴出している今日、保健師の力がますます必要とされているはずである。しかし、「地域全体の健康づくり」という本来の役割は埋もれつつあり、活動の成果は見えにくく、保健師という職種のアピールは不十分である。今、求められているのは、こうした「見えないものを見るようにする努力」であり、住民と共有できる明確な活動のビジョンを描くことではないだろうか。

新年のスタートにあたり、右のような視点を踏まえ、3人の識者に今後の地域保健活動のビジョンを語っていただいた。



中山貴美子さん

神戸大学大学院保健学研究科
地域看護学領域 講師



鳩野洋子さん

九州大学大学院医学研究院保健学部門
看護学分野 地域・精神看護学 教授



金子仁子さん(司会)

慶応義塾大学看護医療学部
地域看護学 教授



北海道第二の都市で奮闘する2年目のひよこは

良き先輩に囲まれすすくと成長中!!

「予防」のプロを目指す、
ひたむきな向上心

大雪連峰をバックに制服姿で記念撮影



旭川空港に向かい高度を下げていく飛行機から色とりどりの木々が見える。すっかり肌寒くなってきた10月中旬の北海道は、紅葉がそろそろ終わろうとしていた。

今回は空港のすぐ近く、旭川市の保健所所属のひよこさんに会いにきた。いつもなら空港からレンタカーで庁舎まで行くのだが、出迎えてくれるという。さて、どんな人なのだろう？いつものことながら期待いっぱいにはロビーに出ると、満面の笑顔で迎えてくれたのが、旭川市保健所保健指導課の佐藤由希さんと上司(主査)の山本東美(はるみ)さんだった。

印象的だったのは会った瞬間、おふたりとも昔からの知り合いのように思えたことだ。上司と部下といっても姉妹のように仲が良く、周りを一気に和ませるオーラが出ていた。これは楽しい取材になりそうだ。



就実の丘にて、上司の山本さん(左)と佐藤さん

予想は当たった。まずは旭川の良いところを見てほしいと、アップダウンの激しい一本道「ジェットコースターの道」や美しい丘陵地帯が広がる「就実の丘」。そして定番の旭山動物園を巡りながら、地元ならではのガイドをし

てくれる。ひよこ保健師の取材に来たのか、旭川観光に来たのか分からなくなるほど私も楽しんでしまった。もちろん、話を聞く前から佐藤さんが職場を気に入っていること、課内の風通しの良さはすぐに伝わってきた。

2度の入院で看護師への 思いが膨らんだ

佐藤さんは平成19年度採用の保健師2年目、24歳のひよこさんだ。出身は同じ北海道の稚内で高校までここで暮らしていた。自分が医療関連の仕事に就くことを考えたのは、かなり前のことだ。

「幼稚園のころ、川崎病で入院したのです。そのときに『看護婦さんっていいな』って憧れました。中学のころにも看護職に憧れがありまして、本格的に考えたのは高校生のときでしょう